

チェック!

原因と対策を把握し 肥育牛の突然死を防ぐ



今回のテーマは
細菌が引き起こす
肥育牛の突然死
についてです。

肉牛の肥育では、順調に育っていた牛が突然死んでしまったという話を聞くことは珍しくありません。「去年の秋口には1ヵ月で2頭死んでしまった」とか「特に夏場は気をつけなくてはいけない」と話される方のショックや不安は相当なものです。牛が足を投げ出して寝ている姿にドキッとされる方もいらっしゃるのではないのでしょうか？ 今回は肥育牛が突然死する原因と対策について紹介します。

●クロストリジウムが原因となる突然死

悪性水腫：クロストリジウム・セプチカムという細菌が傷口から感染し、数日のうちに死亡します。最初は傷口とその周囲がむくんで膨らみ、死亡時には全身が膨らんだ状態になります。飛び出したクギは抜き取るなど、牛が怪我をしないよう牛房の中を安全な状態にしましょう。

気腫症(写真)：

クロストリジウム・シヨーベイという細菌が原因です。これは外傷のほか、経口感染



気腫症で死亡した牛

もあります。足や肩などの筋肉の部分が膨らんで歩き方がおかしくなり、1～2日で死亡します。牛の怪我予防に努めるとともに、餌が糞や泥で汚れないようにし、飼槽や水槽も常に清潔に保つことが大切です。

壊死性腸炎：クロストリジウム・パーフリンゲンズという細菌が原因です。濃厚飼料の食べ過ぎや給与飼料の急変に加え、気候の影響やジメジメした敷料などでお腹を冷やしたりすると、この菌が腸で急激に異常増殖します。腸内容1g当たり10万個から、ときには10億個に達します。その結果、腸はダメージを受け、菌が出す大量の毒素で牛は急死します。濃厚飼料の過食や飼料の急変を避け、敷料も定期的に交換しましょう。ビタミンAの欠乏でこの病気になりやすくなるともいわれていますので注意してください。

クロストリジウムは非常に丈夫な細菌です。これらの病気で死亡した牛がいた牛舎内は、クロストリジウムに高濃度汚染されていますので、牛舎内は徹底的に清掃消毒してください。ワクチンも市販されています。発生が心配な農場では予防接種を検討してください。

●ヒストフィルス・ソムニが原因となる突然死

以前はヘモフィルス・ソムナスという名称でした。「ヘモ」といったほうがおなじみでしょう。この菌は、普段は健康な牛の鼻でおとなしくしています。しかし、長距離輸送、飼養環境の悪化などで牛の抵抗力が弱まると菌が暴れだし、突然死や肺炎の原因になります。1日の気温差が大きい春や秋に導入した肥育素牛は特に注意が必要です。菌が脳に達するとおかしい歩き方や痙攣などの神経症状が出て、やがて起立不能になり死亡します。この病気に対してもワクチンがあります。

●ビタミンB1欠乏による突然死(大脳皮質壊死症)

12ヵ月齢までの発育のよい個体では特に注意が必要な病気です。牛はビタミンB1が欠乏すると脳がダメージを受けます。歩き方がおかしくなったり盲目になるなどして、数日で死亡します。クロストリジウムやヘモは発熱しますが、この病気では発熱はありません。また、神経症状が現れる前に下痢を起こすこともあります。ビタミンB1の注射で回復すれば本病であると考えられます。予防には「くみあい起き上がりこぼし」の飼料添加が有効です。

大事に育てた牛が突然死んでしまうことは非常に悲しいことです。同じことを繰り返さないためにも原因を正確に把握し、予防に努めてください。

「くみあい起き上がりこぼし」は、ビタミンB群をバランスよく配合し、微量ミネラル・ビタミンも補強した混合飼料。イラストはマスコット

